

ポール・ヴァレリー『テスト氏との一夜』

— 新訳の試みと訳註 —

恒川 邦夫

テスト氏との一夜<sup>(1)</sup>

Vita Cartesii res est simplicissima<sup>(2)</sup>

愚か事はわたしのよくするところではない<sup>(3)</sup>。沢山の人たちを見てきた。いくつかの国も訪れた。熱心ではなかった<sup>(4)</sup>。色々な事業にも首をつっこんだ。ほとんど毎日食事もしたし、女にも手を出した。今ふり返ってみれば、数百の顔、二つ三つのすばらしい光景、そして恐らくは二十冊ばかりの本の中身が脳裡にうかぶ。ただわたしとしては格別上等なもの、あるいは下等なものを記憶にとどめた<sup>(5)</sup>つもりはない。残ることができたものが残っただけだ。

こうした算術のおかげで、わたしは自分が年を取ったなどと驚かないですむ<sup>(6)</sup>。それに、いざとなればわたしだってわが精神の勝利の瞬間を数えあげ、それらの瞬間が結合され、一丸となって幸福<sup>(7)</sup>な生涯を形作るのを想像することも

できるだろう……しかし、わたしはこれまでつねに自分を正しく評価してきたと思う。自分自身を見失うことなどめったになかった。あるときは自分を嫌悪し、あるときは自分を熱愛して——そうして両者ともに年を取ってきたのだ。しばしばわたしは自分にとってすべては終わったと想定してみた。そしてある苦しい状況をなんとか究めつくし、明らかになりたいという思いにかられ、あらん限りの力をふりしぼって自分に決着をつけようとした。その結果わかったことは、われわれは自分の考えをあまりに他人の考えのかたち<sup>(9)</sup>に照らし合せて評価しすぎることだ！ 爾来、わたしの耳もとでぶんぶん唸り声をあげていた無数の言葉は、人々がそれらに仮托する意味によってわたしを揺り動かすことは滅多になくなった。また、わたし自身が他者に向けて発する言葉についても、それらはすべてわたしの思考とは不断に区別さるべきものだと感じてきた——なぜなら、発せられた言葉は不変のものとなるからである。

もしわたしが大方の人たちと同じように決意していたら、わたしも自分を人並以上の人間だと思っただろうし、そればかりでなく、人の眼にもそう映っただろう。しかしわたしは他人よりも自分を選んだのだ。すぐれた人と呼ばれる人は自分を欺いた人である<sup>(14)</sup>。その人に驚くためにはその人を見なければならぬ——そして、見られるためには姿を現わさなければならぬ<sup>(15)</sup>。かくしてその人は自分の名前に対する愚かな偏執にとりつかれていることをわたしに示すのだ。そのように、偉人などといわれる人はすべて一つの過誤に身を染めた人である。世にその力が認められるような精神はすべて己れを人に知らせるといふ誤ちから出発する<sup>(16)</sup>。公衆から酒手をもらうのとひきかえに、彼は己れの存在を世に知らしむるために必要な時間をさき、己れを伝達し、己れとは本来無縁な満足を準備するためにエネルギーを費消する<sup>(17)</sup>。そしてついには栄光を求めて演じられるこうしたぶざまな演技を、自らを他に類例のない唯一無二の存在と感ずる喜び——大いなる個人的快樂——になぞらえるにいたるのだ<sup>(18)</sup>。

そこでわたしは夢想した。もっとも強靱な頭脳、もっとも明敏な発明家、思考のなんたるかをもっとも正確に認識

している人々はすべからく無名の人であり、己れを惜しみ<sup>(19)</sup>、己れを語ることなく死んでゆく人でなくてはならない、と。そうした人々の存在にわたしの目が啓かれたのは、ほかならぬ、やや志操の堅固<sup>(20)</sup>さに欠けるがゆえに、名声が赫々として世に現われた人々の存在そのものによってである。

この帰納は容易であった。いつでもわたしの眼にはその節道が目に見えていたほどだ。格別に傑出しているというのではなくとも、世に名の聞えているほどの人たちで、もし彼らがその出発点における誤ちを犯していなかったら、あるいはその誤ちにその後よりかかるようなことをしていなかったらと想像してみればいい、それだけで十分わたしには、意識のいっそう高度な一段階、より洗練された精神の自由感とはいかなるものであるかが理解できるのであった<sup>(21)</sup>。そしてこうしたごく単純な操作<sup>(22)</sup>によって、わたしの眼前に、あたかも海の底に降り立ったときのような奇妙な広がりが開かれてくるのだ。公けにされたさまざまな発見の光輝のかけに隠れて、商売や危惧や倦怠や貧困が原因となつて日々埋もれていく幾多の発明の傍らに、わたしは内なる精神の幾多の傑作を見ることができるよう思った<sup>(23)</sup>。わたしは誰もが知っている歴史を匿名の年代記の中に消滅させて楽しんでいたので<sup>(24)</sup>。

世に先がけて知っていたのは、各人の清澄な生活の中にひきこもつて姿をみせない、孤独者たちだったのだ。わたしには彼らこそ世に聞えた人びとを二倍にも三倍にも、幾層倍にもした人物に思われた——彼ら、自分たちのつかんだチャンス、独自の業績を公開することを潔しとかなかったものたち、思うに、彼らは乞われても自分を世の中のもの<sup>(25)</sup>と違った別のものと観じることを拒んだであろう人たちだった。

こうした考えがわたしを頻りに訪れたのは九三年の十月、思考がただ思考の運動を楽しんでいるばかりの徒然<sup>(26)</sup>なるときにおいてであった<sup>(27)</sup>。

やがてそんなことに想いをめぐらすこともなくなり始めたころ、わたしはテスト氏と知り合った。(いまわたしは

一人の人間が毎日動きまわる小さな空間の中に残す足跡について考えている。テスト氏と親交を結ぶまえから、わたしはテスト氏の独得な挙動に興味を引かれていた。わたしは彼の眼、服装、行きつけのカフェでボーイに話しかけるぼそぼそした片言隻句を注意深く観察した。<sup>(28)</sup>はたしてテスト氏は自分が観察されていることに気づいていただろうか。わたしは眼をすばやくむこうの眼からそらせて、むこうの眼がわたしの眼を追ってくるのをつかまえてみようとしたりした。彼が読み捨てたばかりの新聞をとりあげて、彼の控え目な挙措<sup>(29)</sup>のあれこれを心の中で反芻してみることもあった。テスト氏に注意を払う人など誰もいないことにわたしは気づいていた。

こうしてこの種のことについてはもはやなにひとつ知らないことがなくなったとき、わたしたちは交際し始めたのである。彼とは夜しか会わなかった。一度はあやしげなところであいまみえたこともあったが、多くは劇場<sup>(30)</sup>で一緒になった。人の話では彼は株式取引場で毎週ごく僅かな取引をして生計を立てているらしかった。食事はヴィヴィエンヌ通りの小さなレストランで取っていた。そのレストランで彼はまるで下剤でもかけるように大変な勢いで食べるのだった。<sup>(31)</sup>ときには奮発して、よそへ行ってゆっくり御馳走を賞味することもあった。

テスト氏はたぶん四十歳ぐらいだったろう。異常な早口で、声はくぐもって聞き取りにくい。そればかりではない、彼にあっては眼も手もすべて人目をひくような表情はみせなかった。<sup>(32)</sup>ただ肩だけは軍人のようにがっちりしていて、歩調は驚くほど規則的であった。話をするときに、腕をあげたり指を立てりすることはけしてなかった。彼は操り人形<sup>(33)</sup>など殺してしまっていたのだ。笑みを浮べてみせることもないし、今日<sup>#, ジェナル</sup>はも今晚<sup>#, ツワール</sup>はも言わなかった。人が「ご機嫌<sup>#, レヴ</sup>いかがですか」と言っても聞えないみたいにしていた。

彼の記憶力というのはわたしにとって考えさせるところの多い特異なものだった。<sup>(33)</sup>わたしが判断し得た限りの特徴からすると、そこにはなにかしら比類のない知的体操とでもいうべきものが存在することが想像された。彼にあって、

記憶力とはある種の過剰な能力ではなく——鍛練され、もしくは、改造された能力なのだった。<sup>(34)</sup>彼自身こう言っている。「本というものを持たなくなってもう二十年になる。自分が書いたものも焼いてしまった。わたしは精神に生起するものに直接赤を入れるのだ……わたしはわたしが欲するところのものを記憶に残す。しかし、困難はそこにはない。難しいのは明日わたしが欲するところのものを残すことだ！……わたしは機械的に選別する篩<sup>ふるい</sup>を探してきた……」

彼の言葉の意味をいろいろ考えたすえ、わたしはテスト氏がわれわれの知らない精神の方則を発見するに到ったのだと信ずるようになった。まちがいなく彼はその探究に多くの年月を捧げたに相違ない。そして彼の発明を成熟せしめ、それを自分の本能と化すまでにはさらに幾多の年月、以前にもまして多くの年月を必要としたことはもって確かなことだ。発見はなにものでもない。難しいのは発見したものを自らのうちに血肉化することである。

持続がもたらす微妙な作用、すなわち時間の問題、その配分と体制<sup>レイジム</sup>——よく選ばれた対象に、それらを特別に育てあげるために、消費される時間量——テスト氏の大きな探究の一つはそれだった。<sup>(36)</sup>彼はある種の観念が反復して現われることに注目し、それらの観念に数を注入した。<sup>(37)</sup>それが彼にとって自分の意識的研究成果の適用を最終的に機械的なものとなすのに役立った。<sup>(38)</sup>彼はそうした仕事を簡潔な形にまとめてみることをさえ考えていた。彼はよく口にしていたものだ。「Maturarei(成熟させること)……」と。<sup>(39)</sup>

たしかに彼の特異な記憶力は、われわれの抱くもろもろの印象のうちで、およそ想像力だけでは構築できないような種類の印象のみを選別して記憶に残していたに違いなかった。たとえばわれわれが気球に乗って旅することを想像するとき、われわれは明敏さと力強さを持って気球乗りが体験するであろうさまざまな感覚をつくりだすことができる。しかし、実際の気球旅行には、そうした感覚とは別に、なにがしかの個人的な感覚が必ず介在するはずだ。実際

の旅行とわれわれの想像とのそうしただれの部分にこそ、エドモン・テストのごとき人物の方法の価値が現われるのだ。<sup>(40)</sup>

この人はいわば人間の可塑性<sup>(41)</sup>とでも言うべきものの重要性に早くから気づいていた人だ。彼はその限界とメカニズムとを探究してきたのだ。自らの展性とともいうべきものにいかばかりか思いを凝らしてきたに違いなかった。

わたしはそこにわたし自身を震撼させるような幾多の感情のドラマ、ひとたび着手すれば酒精のごとく心を奪ってしまう実験にあくまで固執するすさまじい意志の力を垣間みただった。<sup>(42)</sup> 彼は自らの変容に心を奪われた存在であり、自らが自らの体系となり、自らのすべてを自由な精神の恐るべき規律にゆだね、自らの喜びを自らの喜びによって制す人、もっとも弱い喜びをもっとも強い喜びによって、もっとも甘美な喜び、束の間の、すなわち一瞬の、目覚めゆく現在時の喜びを根本的な喜び——根本的な喜びへの期待によって制す人であった。<sup>(43)</sup>

そしてわたしは彼こそ自分の思想の主<sup>(44)</sup>とはっきり言える人だと感じていた。こんな言い方はおかしに感じない。しかし感情の表現などというものはいつだっておかしなものなのだ。<sup>(45)</sup>

テスト氏は意見というものを持っていなかった。彼は彼なりに熱中し、一定の目標に到達しようとしていたのだと思う。それなら彼は自らの個性をどう処理していたのか？ 彼は自分自身をどんなふうに見ていたのか？……彼は決して笑わなかったが、その顔に不幸の影がさざしたこともなかった。彼はメランコリー<sup>(46)</sup>というものが大嫌いだ。彼が話し始めると、聞き手はたちまち彼の考えの中にひきこまれ、さまざまな事物と自分が一体となるのを感じたのだ。背後に家々や空間のさまざまな広がり、街路のゆれ動く色彩、街角といったものを感じ、そこに溶けこんでいくような感覚にとらわれるのだ……<sup>(47)</sup>そして人の心をこの上なく巧みに捉える言葉——その言葉を口にする人を誰よりも身近に感じさせる言葉、われわれの精神の間に立ちふさがる永劫の壁が崩れ落ちるような気持にさせる言

葉——まさにそうした言葉が彼の口から発せられることもあった……彼はそうした言葉が自分以外の他者を感動させるだろうということを知悉(47)していた。彼が話すのを聞いてみると、その動機や範圍についてははっきりとわからないながらも、相当数の言葉が会話から追放されていることがわかるのだった。彼が使用する言葉は、ときとして、その声や調子や言いまわしによって独得の照明が与えられるため、その重みが変化し、意味が新しくなるのだった。ときにはその本来の意味をすべて失ない、その究極的な意味がなお漠然として定まらなかつたり、言語本来の予測範圍を逸脱したりしているままに、ただそこに残された空虚な場をみただけのようにみえることもあった。

彼が言っていることに對して答えるようなことはなにもなかつた。彼は相手の儀礼的な相槌など度外視していた。会話は飛躍しながらどんどん先へ進んでいくのだったが、彼はいっこうに平氣だった。

もしこの人がその内に閉ざされた思索の対象を変え、外の世界に對して彼の精神の安定した力を向けていたら、彼に抵抗できるものはなにひとつなかつたろう。彼について、銅像が立つ人物について世間の人が言うのと同じような言い方をしなければならぬのは残念だ。彼と《天才》との間にはある量の弱さが介在することをわたしは強く感じ(49)る。彼こそ、真実にあふれ、かくも新しく、あらゆる瞞着と眩惑から解放されたこの上なく堅固な人なのだ！ ただこうしたわたしの熱狂そのものが彼のイメージを卑俗にしまし(51)ことになる……

しかし一度たりとも曖昧なことを口にしたことのない人物に對して、また静かな口調で「わたしは万事につけて、それらを認識し、実現するさいの容易さもしくは困難さだけを評価する。わたしはそうした容易さと困難さの度合を計量することに極度の注意を払い、けして自分がなかに執着しないように心している……それにすでに自分がよく知っていることなどわたしにとってどれほどの意味があろう」と言いきる人間に對して、どうして熱い思いを抱かずにいられようか？

その精神がただ自分の必要のためにだけ一切のものを変形し、自分に提起されるすべてのものに対して働きかけるようにみえる人物を目の前にして、どうして夢中にならずにいられよう？ わたしにはこの精神が事物を操作し、混合し、変化させ、通底させ、自らの認識の領野の中で、思うままに切断し、屈折させ、光をあて、あれを凍らせたかと思えば、これを熱し、沈めたかと思えば高くさしあげ、名前のないものを命名し、望んでいたものを忘れ去り、あれやこれやを眠らせあるいは色付けるさまが目には浮かぶのだった……

わたしは測り知れぬさまざまな特質を大まかに素描しているにすぎない。(53) わたしの対象がわたしに語りかけてくるすべてを言うことなどとてもできない。(54) 論理が障害となるのだ。(55) しかし、わたしの内部では、テストの問題が提起されるたびに、奇妙なイメージが次々に形成され姿を現わすのだった。(56)

彼の姿がきわめて明確にみえる日がある。そうした日には、わたしの傍らに腰をおろした彼の姿が記憶に蘇える。(57) わたしはわれわれふたりがふかす葉巻の煙を吹いこみ、彼の言うことに耳を傾け、緊張して身構える。(58) ときどき、新聞を読んでいて、彼の言ったことを思い出し、おかしいと思うことがある。と、事件が起って、今更のように、彼の考えの正しさを証し立てるのだった。(59) わたしは今でもなおわたしたちが共に夕べを過した時代にわたしにとってこの上なく楽しかった想像上の実験(60)ともいべきもののいくつかを試みることもある。すなわち実際に彼がしているところをみたことのないなにかを想定して、もし彼がそれをしたらどんなふうだろうとその姿を思いえがくのである。テスト氏が病氣(61)になったらどんなふうになるだろう？——恋をしたら、どんなふうに考えるだろう？——彼は悲しむなどということがあるのだろうか？——彼はどういうことを怖がるのだろうか？——一体どんなことが彼を戦慄させるだろう？——……わたしはいろいろと想像をめぐらせた。テスト氏という厳格な人間のイメージはそっくりそのまま保ちながら、そのイメージをわたしのそうしたもろもろの問題に対応させてみようとした……そうするとイメージそ

のものが変わってしまったのだった。

愛し、病み、退屈するテスト氏<sup>(62)</sup>。そんなことならみんな似たりよったりだ。しかし、わたしとしては溜息にも、動物的なうめき声<sup>(63)</sup>にも、テスト氏ならその全精神の規則と形象とを傾注して欲しいと思う。

その夜、それはちょうど二年と三ヶ月前になるが、わたしは彼と一緒に劇場の貸座敷にいた。今日は一日中その夜のことを思い出していた。オペラ座の金色の円柱の傍らに立っているテスト氏の姿が目<sup>(64)</sup>に浮かぶ。テスト氏と円柱とふたつのものが一緒になって目に浮かぶ。

彼は観客席ばかりを凝視していた。彼は棧敷<sup>(65)</sup>の端に立って、場内の燃えるように熱い厩大な人いきれを吹いこんでいた。顔は赤く上気していた。

とてつもなく大きな少女の銅像が、感激のあまりささやかかわしている一群の人々とわれわれの間に立ちほだかっていた。温気<sup>(66)</sup>の底には女のむきだし<sup>(67)</sup>の肌の一片が小石のようにやさしく光っていた。婦人連の持つたくさんの扇が明暗二色の世界に息づき、天井のあかりのところまで泡立つようにゆれ動いている。わたしの視線は夥しい数の小さな顔を一つ一つ品定めし、ふと悲しげな<sup>(68)</sup>顔に行きあつたかと思えば、次には人々の腕のあたりを走り、さまざまな人々の上をへめぐって、ついに燃えつきるのだった<sup>(69)</sup>。みんな自分の席に着いていて、身動きする自由もあまりなかった。

わたしはそこに分類体系を、人間集団のほとんど理論通りの単純な構造、いわゆる社会秩序をみて楽しんでた。この立方体の中で呼吸している人々はすべてこの立方体を律している方則に従い、大きな輪を描いてどっと笑い、グループごとに感動し、個人の内幕<sup>(70)</sup>にかかわるようなこと——独自無双のもの——人にはみせない心の動きを集団単位で大挙して感じようとし、口では言い表わせない感動の高みへはせのぼろうとしているのだ、そう思うとわたしは愉快

でならなかった！<sup>(68)</sup> わたしはそうした人々の折り重なる上に、列から列へ、軌道を描いて視線をさまよわせ、彼らのなかに同じ病い、同じ理論、同じ悪癖を持った人々を探し、一同に会してみたらとあらぬことを考え、空想をたくましくするのだった……ひとつの音楽がわれわれすべての心をとらえ、場内に満ち、やがて絶え入るように小さくなつた。

音楽が消えた。テスト氏は呟いていた。「われわれが美、し、か、つ、た、り、非、凡、だ、つ、た、り、するるのはつねに他者にとつての話だ！ われわれはすべて他者に食われているのだ。」

この最後の言葉はオーケストラの音の途絶えた一瞬の静寂の中で言い放たれた。テストは息をついた。

熱氣と色彩にあおられて火のように燃え立った彼の顔、広い肩、照明の光りで金褐色に染った黒い体、太い円柱に支えられた彼の衣服につつまれた体軀の全容がふたたびわたしをとらえた。彼はこの赤と金の広大なるひろがりの中で刻々と感じとられるものの一切を細大もらず捕捉していた。柱頭の彫り物にびたりと寄りそっているその頭蓋、金泥の冷たい感触を楽しんでいるようなその右手、そして緋色の闇につつまれている大きな両足をわたしは凝視した。彼の眼が場内の遠方からわたしの方へ戻ってきた。そして彼の口が開いた。「規律というものも悪くない……ちょっとした出発点だ……」

わたしは答える術がなかった。彼は低い声で早口に言った。「みんななんて夢中になって楽しみ、大人しく言いなりになっていることか！」

彼はじっとわれわれの正面に座っている青年を凝視した。それから一人の婦人に眼を転じ、次いで上の棧敷にいる一群の人々——上気した顔が五つ六つバルコンからとびだしていた——をひとわたり眺めまわしたあとで、すべての人々、天上のように満ちあふれ、われわれが見ていない舞台のとりことなって熱狂している劇場全体に眼をやった。

われわれ以外のすべてのものがそうして我を忘れている姿は、なんだかわからないが、ともかく崇高なことが今そこに起っていることをわれわれに教えてくれるのだ。場内のすべての顔の輝きが作りだしていた陽光がやがて消えていくのをわれわれはみていた。日がすっかり傾き、もはや光の輝きも失なわれてしまうと、あとには夥しい数の顔に宿った茫漠たる燐光だけしか残らなかった。わたしはこの黄昏が場内の人々すべてを受動的にしていることを感じた。刻々増大する彼らの注意力と暗闇がひとつの不断の均衡を作りだしていた。わたし自身もまた必然的に注意深くなった——そうした彼らの注意力全体に対して。

テスト氏は言った。「崇高なものが彼ら<sup>(71)</sup>を単純化している。断言してもいい、彼らは次第次第に同じものに向って思考していくようになる。危機や共通の限界を前にと彼らはみんな平等になるのだ。ただし、法則はそれほど単純ではない……なぜならその法則にはわたしが考慮のうちに入っていないのだから——そして——わたしはげんこにこにいる。」

彼はつけ加えた。「照明が彼らを一つに保っているのだ。」

わたしは笑いながら言った。「あなたもでしょう。」

彼は答えた。「あなたもだ。」

——「あなたは劇作家になったらすばらしかったですように」とわたしは言った。「あなたはあらゆる科学の極北でなされる実験を注意深く見守っているようにみえる！ そうしたあなたの瞑想に想を得て書かれた劇をみたいものです……」

彼は言った。「だれも瞑想にふける人がいなくなりました。」

拍手とすっきり明るくなった照明がわたしたちを追いだした。廊下をぐるりとまわり、階段を降りた。道行く人々

はくったくなげにみえた。テスト氏は深夜の冷気に少しばかり不平を言った。昔わずらった病氣のことをそれとなくほめかした。

わたしたちは歩いていった。ときどき彼の口からほとんど脈絡のない言葉がもれた。努力してみたがその言葉についていくだけで背一杯だった。だから結局はその言葉を記憶にとどめておくことだけに努力を集中することにした。ある話が一貫性を欠いているかどうかはその話を聞く人間次第だ。思うに精神というものは自分自身にとって辻褃が合わないようなことはあり得ないようにできているのだ。それゆえ、わたしはテスト氏を氣狂い扱いすることは控えた。それに漠然とではあるが、わたしにはテスト氏の考えの脈絡がみえていたし、そこに矛盾はひとつも見当らなかつた——それにまた、あまりに安易な結論をだすことをわたし自身恐れていたこともあつたらう。

わたしたちは夜のしんとした街中を通りから通りへと歩いていった。人氣のない街角をいくつも曲がり、本能的に道を嗅ぎわけた——広い道、狭い道、広い道<sup>(73)</sup>。彼の軍隊式の歩調がわたしの歩みをリードしていった……

「それにしても」とわたしは答えて言<sup>(74)</sup>った。「あれほど強烈な音楽からどうしたら逃れられるでしょう！ それになぜです？ あの音楽には特別な陶酔感を覚えます。その陶酔を軽蔑しなければいけませんか？ わたしはそこにひとつの歴大な精神的営為のあとを垣間見るような気がします。そしてそうしたつものない仕事が突如としてわたしにも可能になるような思いにとらわれるのです……あの音楽はわたしにさまざまな抽象的感覚をひきおこし、わたしが愛するあらゆるものの甘美な形象を味わわせてくれます——変化、運動、混合、流動、変形……この世にああした麻酔剂的効用<sup>(75)</sup>を持つものが存在することをあなたは否定なさるのですか？ 見る者を酔わ<sup>(76)</sup>る樹木、活力を与えてくれる人々、心をしびれさせる娘たち、啞然として言葉を失なわしめるような蒼穹とか？」

テスト氏は声高になって言い返した。

「おやおや、あなた！ あなたの樹木の——あるいはあなたがおっしゃったその他もろもろのもの——《才幹》<sup>タカウツ</sup>などわたしにはどうだっていいことだ。わたしは言わばわたしの自我の内<sup>ウチ</sup>で暮らしていて、自前の言葉をしゃべり、世間でいう並はずれたこと<sup>(77)</sup>というのが大嫌いなのだ。そんなものは脆弱な精神が必要とするものだ。いいですか。わたしの言うことを文字通り信じて下さい。天才などというものは容易<sup>ユウイ</sup>であり、神もまた容易<sup>ユウイ</sup>だということですよ……わたしが言いたいのは単純に——そうしたものがどのように認識されるものであるかがわたしには解<sup>トク</sup>っているということです。そんなことは簡単<sup>カンパン</sup>なことだ。

「昔は——もう二十年も前のことだが、——他人がなしとげた水準以上の仕事というのはずべてわたしにとって個人的な敗北<sup>ハクペク</sup>だった。昔はそうしたのを見ると、すべて自分の考えが人から盗<sup>ヌス</sup>まれたようにしか思えなかった。<sup>(78)</sup>なんと、自分自身のイメージを過大に評価する<sup>(79)</sup>か、過少に評価する<sup>(80)</sup>かどちらかだ……！」

彼は咳をした。それから咳いた。「ひとり人間になにができるか？……ひとりの人間になにができるか！……」  
そしてわたしに向って言った。「あなたは自分の言<sup>コト</sup>っていることが自分にはきちんとわか<sup>ワカ</sup>っていないことをわきまえている人間をひとり友人に持っているわけだ！」

わたしたちは彼の戸口までやってきた。彼は上<sup>ノボ</sup>って葉巻でも一服していってくださいと言<sup>コト</sup>った。建物の一番上までのぼって、われわれは《家具つき》のごく小さなアバウトマンに入った。見たところ本は一冊もなかった。いわゆる机の前に座<sup>マ</sup>って、ランプの下で、紙やペンにうずもれてする昔ながらの仕事<sup>(81)</sup>がなされている様子はまったくなかった。薄荷<sup>ハッカ</sup>のにおい<sup>ニオイ</sup>のする緑<sup>キナンド</sup>がか<sup>か</sup>った部屋の中には、ろうそくの周囲に抽象的な陰気な家具がそなえつけられてあるばかり

だった——寝台、振り子時計、鏡のついた衣裳戸棚、二脚の脇掛椅子——それらはまるで観念的存在<sup>(82)</sup>のようにそこにあった。暖炉の上には新聞がいくつかと数字がいっぱい書きこまれた十数葉の名刺、それに菓の小びんが一つ置かれていた。わたしはこれほどある任意<sup>(83)</sup>のという印象を強くうけたことがなかった。それは数学の定理でいうところの任意の点と同じ意味で任意の住居<sup>(84)</sup>なのだった——そして恐らくそれと同じように有効な住居なのだ。わたしを招いてくれたこの家の主人はおよそ考え得る限り最も一般的な室内に住んでいた。わたしは彼がこの脇掛椅子ですごす時間のことを想った。そしてこのように純粹にして平凡な場所<sup>(85)</sup>でその主が味わうだろう無限の悲しみを思つて恐怖を覚えた。わたしもまたこういう部屋に暮した経験があった。しかしこういう部屋が自分にとって生涯の住居になるなどと、恐怖の念なしに思うことはけしてできなかった。

テスト氏はお金の話をした。彼の独得の雄弁を再現してみせることはわたしにはできない。ただその雄弁もいつもよりは嚴密さを欠いているように思われた。疲労と夜が更けると共に強まる静寂と葉巻の苦い味と夜の放心<sup>(86)</sup>とが彼におしよせてきているようにみえた。わたしには彼の低くおさえたゆっくりとした声<sup>(87)</sup>が今も聞こえる。その声は、彼が疲れた調子でなにかとてつもなく大きな数字を引用するにつれて、われわれの間で燃えているただ一本のろうそくの焰をゆらめかせていた。八億一千七万五千五百五十……わたしは彼の計算のあとを追うこともなく、ただその前代未聞の音楽<sup>(88)</sup>に耳を傾けていた。彼はわたしに株式取引所の変動について話していた。その数字の長い行列がまるで一篇の詩のようにわたしの心をとらえていた。さまざまな出来事や産業界の動向、大衆の好みや流行<sup>(89)</sup>をあれこれあげつらい、ふたたび数字をつきあわせてみるのだった。そして言うのだった。「お金は社会における精神のごときものだ。」

突然彼は口をつぐんだ。そして苦しうにした<sup>(87)</sup>。

わたしは彼を見まいとして、あらためて冷え冷えとした部屋と味気のない家具をみまわした。彼は葉びんを取って

飲んだ。わたしはおいとましようと思ち上った。

「もう少しいらっしゃい」と彼は言った。「気になさらないで下さい。<sup>(88)</sup>わたしはベッドに入ります。ほんの僅かの時間で寝てしまいますよ。そしたらろうそくを持って降りてらっしゃるといい。」

彼は静かに服を脱いだ。やせた体がシーツの中に沈んで、しばらくじっと動かなかつた。<sup>(89)</sup>それから寝返りをうって、短かすぎる寝台の中へぐっともぐりこんだ。

彼は笑いながらわたしに言った。「浮身をしてるんです。体の下にそれと気づかないほどの揺れを感じます——と言うより、なにかとてつもないうねりのようなものを感じるといった方がいいかな？ わたしが寝るのはせいぜい一時間か二時間です。わたしは夜の航海が大好きでね。しばしば眠りに落ちる前には自分の意識にけじめがつかなくなる。本当に眠ったのかどうかわからなくなる。昔はうとうとしながら、いろいろ楽しかった人の姿や物、出来事を思い出していたものだった。意識ができる限りやさしくなり、寝台と同じように楽になるように、そうしていたんです……わたしはもう歳だ。どうしてわたしが歳を取ったと感じているのかあなたに説明してさしあげてもいいが……そうだ、あなたにも覚えがあるでしょう！——子供の時分、われわれはみな自分の体を発見するんです。自分の身体の広がりや少しづつ発見していき、いろいろ体を動かしてみても自分の体の特殊性を表現する、そうでしょう？ 体をねじっては自分の体を確認する、もしくは再確認する。そしてびっくりする！ 自分の踵にさわったり、右の足を左の手で握ったり、熱い掌に冷たい足の感触を体験したりする……いまやわたしは自分の体を空んじている。心の問題だとして知りつくしている。やれやれ！ 土地はすべて約定済みで、どこの地所にも家が立っている——残るはわたしの寝台だ。わたしはこの眠りとシーツの流れが好きなんです。つっぱったかと思えば、しわが寄り、もみくちゃになるこのシーツ——じっと動かないでいると砂のようにわたしの上に落ちてくるし——眠るとわたしの体のまわりに

凝固する……これはなかなか複雑な力学ですよ。緯糸か経糸の方向にちょっとした変形が起ると……あっ！」  
彼は苦しそうにした。

「どうなさったんです」とわたしは言った。「なにかわたしに……」

——いや、と彼は言った。大したことはありません。ほんの瞬間のドラマですよ……待って下さい……わたしの体が光を放つ瞬間があるんです……実におもしろい。そうした瞬間にわたしは一瞬自分の内部をのぞき見るのです……自分の肉体の深層部がひとつひとつはっきり見え、苦痛の帯域、環、極、火花の所在を感じるのです。あなたにはそうした生きた形象、わたしの苦痛の幾何学が見えますか？ なかには観念と酷似した苦痛の閃光もありません。そうした閃光はわたしにはっきり教えてくれる——ここからあそこまでというふう……しかし、そうした閃光も最終的にわたしを不確定な状態から解放してくれるわけではない。不確定というのは適切な言葉ではないが……そいつがやってきそうになると、わたしは自分の中になにかしら混乱した、焦点が定まらずに拡散したものを感ずる。わたしの内部に……ぼう々と霧がかかったような場所ができ、ある帯域があちこちに出現する。そうすると、わたしは記憶の中になにかひとつの疑問、なんでもいい、適当な問題を探して……それに意識を集中するのです。たとえばわたしは砂粒を算えます……その砂粒が見えている限りは……——だんだん激しくなってくる痛みがいやでもわたしの意識を痛みに向けさせます。痛みが意識の前面にでています！——あとともう、自分の叫び声を待つばかりです……そしてその声を耳にすると同時に——対象は、その恐るべき対象はたちまち小さくなり、さらに小さくなってわたしの内部の視界から消えていくのです……

「ひとりの人間になにができるか？ わたしはあらゆるものを制圧する——ある限度を越えた肉体的苦痛以外は。しかしわたしの出発点はまさにそこにこそ求められるべきでしょう。なぜなら、苦しむということはあることに極度の

注意を払うことであって、わたしもまたある意味で注意力の人だからです……よろしいですか、わたしは未来の病いを予測していたの(10)です。わたしは世間のみんなが少しも疑わないことを、いま一度、厳密に考えてみたのです。思うに未来に必ず起ることがわかっている事柄に対するこうした見通し(10)は、教育の一部に加えられるべきでしょう。そうです、いま起っていることをわたしはつとに予測していたのです。予測したときには、それは多くの観念のうちの一つにすぎなかった。だからこそ、わたしはそれを追ってこれたの(10)だ。」

彼は静かになった。

横を向いて体を折り曲げ、目を伏せた。それから、一分もすると、ふたたび話し始めた。ときどき意識があやしくなりだした。彼の声はもはや枕にむかって投げかけられる眩きにすぎなかった。彼の赤くなった手はすでに眠っていた。

彼はなおもしゃべっていた。「わたしは考える。考えることはなんの邪魔にもならない。わたしはひとりだ。孤独とはなんと心地よいものか！ 感情をかき乱すようなものがわたしに重くのしかかるようなことはなにもない……船のキャビンやカフェ・ランベールでむさぼる夢想と同じ夢想がここにもある……ベルトのような女の腕が意識のさばってくると、わたしはやられてしまう(10)——苦痛の場合と同じだ……わたしと話をしようというなら、言うことができちんと証明できるのでなければ——敵だ。どんなちっぽけな考えでもいい、それが精神に形成される際の輝きの方がわたしにはいい(10)。わたしは現在する存在であり、その自分を見ている存在だ。自分を見る自分を見る。以下同様……仔細に考えてみよう。やれやれ！ どんなことを考えてでも人は眠れるものだ……眠りはどんな考えでも続けていく

……」

彼は静かにいびきをかいていた。わたしはそのいびきよりも少し静かに、ろうそくを取り、忍び足で部屋を出た。

\* 本稿はポール・ヴァレリーの『テスト氏との一夜』*La Soirée avec Monsieur Teste* の生立過程を主題とする本論に先立つ同作品の新訳の試みである。

同作品にはつとに小林秀雄による名訳があり、フランス語を解さない人はもとより、フランス語・フランス文学を専門とする人の中にも、若き日に小林秀雄訳によってこの作品に初めて接し、感銘を受けた人が少なからずいると思われる。今日見るに、小林訳は一種の名調子の訳であって、極言すれば原文の正確な意味の捕捉よりは、小林秀雄一流の切れ味のいい裁断と精神の律動によって再構築された『テスト氏との一夜』に他ならない。それゆえ小林節の信奉者には一字一句ゆるがせにできぬ作品とも映ろうし、翻訳というものが所詮どこまでいっても、そのもともと本質的な部分において裏切るものであるという立場からすれば、小林訳の不正確さはいわゆる専門家の血の通わない正確さよりも数等上であり、ひとつの精神文化への滋養分として格段にすぐれているということもできよう。

しかし今日もっとも新しい形でわれわれの眼にふれる小林秀雄訳の『テスト氏……』（筑摩書房による一九七七年刊行の増補版ヴァレリー全集2『テスト氏』所収）も、大筋においては、一九四四年の翻訳（筑摩書房版ヴァレリー全集第三巻『テスト氏・楽劇』所収）を踏襲したものであって、ヴァレリー歿後の歴大な『カイエ』の写本版の刊行およびブレイヤード叢書による抜粋二巻本（筑摩書房による翻訳で全九巻）の編纂などその後のヴァレリー研究の進展に照らし合せてみれば、多くの点で正すべき点があるように思われる。

知的なものが恐ろしい勢で商業主義にとりこまれていく時代にあつて、人間の精神活動のもっとも根源的な姿を探究し、知的當為のなんたるかを身をもって示したヴァレリーの思索はいまなお新鮮な衝激力を失っていないばかりか、ますます大きな意味を持ちつつあると思われる。その意味でも、ヴァレリスムのマニフェストともいえる『テスト氏……』を正確に読むことは、ヴァレリスムの正しい理解に、必須の要件であらう。

しかしながら一つのテキストの「正確な読解」などというのは言うに易しく、まことに多くの陥穽にみちた危険な作業である。

ましてやそれが二つの異質な言語にまたがる翻訳ということになればなおさらであろう。はじめ、筆者が抱いた安易な期待は、訳者が強烈な個性の持主であっただけ色濃く落ちた小林秀雄の陰影を『テスト氏……』から拭い去ったら、どんなテスト氏の素顔がそこに現われるかという点にあった。しかし実際に作業をすすめてみてみれば、小林訳から小林秀雄の色付けを取り除くということは、いわば香り高いものからその香気を取り除いて、正確さという測定困難な幻想の物さしをあて、いたずらに細部をいじくりまわすのに等しい暴挙かもしれないという不安に襲われることになる。本稿がやや過剰に思われるほどの訳註を付されているのはそれ故である。過剰に思われるといっても、それはあくまで訳文の分量との比較においてであって、読者によってはまだ説明が十分でないと思われるかもしれない。また反対に、ある種の訳註は明敏な読者には自明の理であって不必要に思われるかもしれない。原則は、既訳の解釈と拙訳の解釈が異なる場合には、その都度、拙訳のよってきたる言語的・ヴァレリー学的根拠を提示したことで、字句上の異同はいくらかあっても解釈の根本が違わない場合や、ヴァレリーの思想全般に関わる解説的註は本論にゆずることにし、訳註の範囲に含めなかった。筆者の解釈が正しいか正しくないかは識者の判断を待つばかりであるが、ささやかながら差異を提示したことが、ヴァレリーに関心を抱く人々にとって一種の知的挑発となれば幸甚である。

翻訳の定本には Paul Valéry, *Oeuvres* II, 1971, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard を用いた。

また、比較参照する翻訳としては、A 小林秀雄訳（一九七七年筑摩書房刊行の増補版ヴァレリー全集2『テスト氏』所収）

B 村松剛・菅野昭正・清水徹訳（一九六〇年筑摩書房刊行の世界文学体系56『クローデル ヴァレリー』所収）を用いた。（以下訳註ではそれぞれA・Bと略記する。）

訳註

(1) 『テスト氏との一夜』は原題 *La Soirée avec Monsieur Teste* の訳である。soirée は単なる夜、夕べではなく、夜会、パーティー、ダンス、観劇など夜の娯楽の時間を指す言葉である。ここでは具体的にこの小品の後半に描かれるオペラ座での観劇の一夜を指している。（定冠詞に注意）

(2) このラテン語のエピグラフは初出の『天馬』誌（一八九六年）にはなく、一九二六年のロナルド・デイヴィス社版に初

めて付されるものである。なお同版には「ド・ラエ氏からド・リンボルシュに宛て」という出典を示す言葉が付されている。

直訳すれば「デカルトの生(涯)は最も単純なものである」となるが、これをあえてエビグラフにかかげたヴァレリーの意を敷衍して言うなら「あの後世の精神世界に測り知れない影響を与えた厳密なる精神の人デカルトにして、その実人生の日常はまことに単純この上ないものであった」ということになるだろう。単純とはまざりけのないこと、とくにヴァレリーの文脈では、感情の嵐とか世俗的な屈托事にわずらわされないとはいうほどの意味である。

(3) 有名な書き出しの一文 *La bêtise n'est pas mon fort.* の訳。文型はごく簡単であるが、全体のトーンを決定するような一文であり、*bêtise* という言葉の使い方が極めて特殊であるため、原文の簡潔さをあまり損わないように翻訳するのは至難の技である。まずはっきりしているところからおさえておくなら、*mon fort* は「わたしの強いところ、得意とするところ、よくするところ」の意である。とすれば要は *bêtise* の意味するところである。まず *bêtise* という言葉が現代フランス語として持っている(響かせている)普通の意味は「愚かさ(愚鈍、軽率)」、愚かな(軽率な)言動、とるにたりないこと(つまらないこと)といったものであることを頭に置いておくとして、テキスト読解の基本である作品にもどって考えてみれば、ここで *bêtise* と言われていることの具体的な内容はこの最初の一文に続く「沢山の人々をみてきた……」以下「残ることができたものが残っただけだ」までに至るパラグラフに示されているのではないか。すなわち「わたし」にとって *bêtise* とは「人と会ったり、旅行をしたり、事業に手を出したり、食事をしたり、女を抱いたりすることなのであり、もう少し広げれば「本を読む」ことも入りそうである。そうしてみれば、*bêtise* とは *bête* (動物、「人間の」獣性) がなせる業のこととも考えられる。すなわち、動物としての人間のするすべてが *bêtise* なのである。それなら *bêtise* に対する概念はなにかといえ *intelligence* *paq* (cf. M. A. Leuyer, *Etude de la prose de Paul Valéry dans «La Soirée avec Monsieur Teste», Minard*) のあたりの事情を思いきって簡便に言い切ってしまうは「わたしは精神/知性の人間であって、こと動物的な人間の営みについては平々凡々としていて、また自分からことさらの関心も抱かない」といったところだろう。前の註で説明したエビグラフの効果もそうしてみれば一層わかりやすい。

さて以上のように考えて旧訳を吟味してみると言わば小林秀雄の定訳と考えられるAでは「僕には、自分の愚さは、うまく

扱えない」となっていて、「自分の愚かさ」といったところが少し的を外れているように思われる。もっと古い訳では *graves* が「馬鹿な真似をする」となっていてこれもおかしい。馬鹿な真似は馬鹿な真似でも、個人の愚かさとしてではなく、「人間が生きたるためにするさまざまな馬鹿々々しい真似」でなくてはならない。さらに翻訳Bでは「愚かしさは私には、自分ながら扱いかねる部分なのだ」となっている。「自分の愚かさ」が「愚かしさ」となっているが、文章全体の印象からすると、「愚かしさ」というからにはやはりかく言う自分だけに関わっているようで、Aと同工異曲ではないのか。

結局、拙訳では *graves* を「愚かさ」と訳し、文章の流れで、愚かさとは以下に述べることだとわかるように配慮したつもりだが、果して成功したかどうか。

もう一つAもBも *rest pas mon tort* という述部を「うまく扱えない」「自分ながら扱いかねる」というふうには、あたかも「自分としてはなんとかうまく扱っていきたいのだが、どうも手に負えない」といった調子に訳している。しかしそれでは「沢山の人たちをみてきた……」以下に言われる、通常の人間の生活のドラマを構成するようなものもろの「愚かさ」に対して「わたし」は本質的に無関心なのだといった調子の表白と矛盾するのではないか。むしろ好悪の感情にも通底する「得意・不得意」という言葉を使った方がいいのではないか。(『テスト氏……』の文脈とは別に、ヴァレリーが実際は人並はずれた感情家であり、生涯に女性関係においても、とても純粹精神の人とは思えない心の葛藤に苦しんだということ、まさにそうした意味で、「愚かしさは自分ながら扱いかねる部分だった」ことはあるにしても、こと『テスト氏……』の冒頭の文脈に限って論じれば、Bの訳はやや狭く偏向して、後に続く部分との整合性に欠けるように思われる。)

「人間の事象であれ、物理的事象であれ、神経系——神経叢——に働きかける事象の愚劣ペライスさに対する強い感情」(写真版『カイエ』第十五卷二六二頁、以下『カイエ』XV・262と記す)

(4) 「熱心ではなかったが」は *sans les* (= *entreprises diverses*) *aimer* の訳。AとBは「好きでもない(のに)」と訳している。とくに異論はないが、対象に対して愛着をもたないままに色々な事業に首をつっこむというのは、結局、熱意の問題であることから訳稿のように訳してみた。「好きでもないのに」というと読みようによっては「好悪の感情は度外視して、とにかく色々(熱心に)やってみた」という意味にもとれ、そうなると基本的に関心がないという文脈と少しずれてくる。

- (5) 「記憶にとどめた(つもりはない)」は動詞 *retenir* の訳。Aは「覚えていた」で同じ解釈だが、Bは「算盤に残す」と訳している。
- (6) Aは「この算術のおかげで、われながら年をとったなどと驚かなくてすむ」と訳して、少々メリハリをつけている。Bは「この算術はわれながら齢をとった、などという驚きから私を遠ざけてくれる」ともっと直訳的になっているが、*Cette arithmétique m'épargne de m'étonner de vieillir* という原文の動詞 *épargner* は「免じる、免除する」であって、「遠ざける」というと多少意味がずれるのではないか。「この算術」とは生きている限り必然的に持つものもろの「愚心事」の蓄積に対する態度の問題であって、「格別上等なもの、あるいは下等なものを記憶にとどめる」わけではなく、「残ることができたものが残った」と観ずる態度である。別様に言えば、あくまで己れの精神の運動の自由を保ちながら、世事からは超然として心を乱されることなく生きていくことによって、通常の時間の概念から免れ得るということであろう。
- (7) 自分を過大にも過少にも評価せず、つねに精神としての自らのありようの本質から目を離さずにやってきたという述懐であろう。*Je crois m'être bien jugé* というのは、その意味で、「自分を正しく評価してきた」ということであろう。AもBも「審判してきた」「裁いてきた」と訳しているが、意味は同じであろう。
- (8) 「すべては終わった」は *['ai supposé que] tout était fini* の訳である。Tout est fini. といえば、一般に、「なにもかもおしまいだ、万事休す」というネガティブなニュアンスがあるが、ここではむしろ「一切のことが自分にとっては明らかに終わった(精神にとってはそれが終りを意味する)状態と解釈すべきだろう。因みに *fin* は哲学・数学の用語としては「有限」という意味であって、*infin* 「無限」の対立語である。
- (9) 「あらん限りの力をふりしぼって自分に決着をつけようとした」は *et je me terminais de toutes mes forces* の訳。一般になにか事柄が終る意味での代名動詞 *se terminer* はよく使われるが、一人称で *me terminer* とは使われない。ヴァレリーの文脈からすれば、ここは「自分を終りにする」ということで、精神的に事態を見通すことによって——ということとはとりもなおさず自己省察(人間精神のメカニズムの深奥を己れの精神の運動を見きわめることによって把握すること)を限界までおしすすめることによって、「自分に決着をつける」ことである。

同じ文章の前段に書かれている「ある苦しい状況」というのは、特異な精神的冒険に自分を捧げることによって、行きつく先も不安にみち、社会的にも埋もれていく状況を指す。たとえばはば『テスト氏……』執筆と同時期の『カイエ』のノートには次のようなノートが記されている。

「すぐ手のとどく所にこんなに沢山のことがあるのにそれを整理するための貴重な時間、かけがえのない時間を持つことができないまま、これまであれほど探し求め、いまやそれをとらえたという手ごたえをいたるところに感じているこの方法をついに使用することなく、わたしは小役人として〔当時ヴァレリーは陸軍省の砲兵材料廠に勤務〕一生を終えなければならないのか？」（「小役人」という言葉のわりに「そうとも、そうとも」という書き込みがある。『カイエ』I・184）

(10) 「無数の言葉」は milliard de mots の訳。A は「数知れぬ言葉」、B は「幾十億の語句」となっている。

(11) 「人々がそれら〔の言葉〕に仮托する意味によつて」は par ce qu'on voulait leur faire dire の訳。A も B も恐らく voulait (vouloir) を強調するために「人々がそういう言葉でなにを意味したがる」と「人々がそこにどんな意味を托していう」と訳しているが、とくにこの voulait には強い意味はなく「仮托する」と言えば十分ではないだろうか。なおこの後の文章の prononcer という動詞は A や B の「発音する」である必要はなく、「〔言葉〕を発する」で十分であろう。

(12) この箇所 A は「人並の決心さえあったら」、B は「人なみに決められるものなら」と訳している。しかし原文は *si j'avais décidé comme la plupart des gens* であるから、ごく普通に「もしわたしが大方の人たちと同じように決意していたら」と訳してさしつかえないのではないか。意味的には補語なしで使われている *décider* という他動詞のニュアンスが問題だが、前後の文脈から「もしわたしが大方の人たちと同様に、人生において他者との関係で自己の存在を確立しようと考えていたのなら」といったほどの意味になろう。とすれば B の訳はやや意味があいまいであり、なにか自己評価の基準について「人なみに決められるものなら」と言っているように受け取れる。

(13) *Je me suis préféré* の訳。註(12)で説明したように「人なみに決意していたら」ということは、結局、「他者（他人の眼）を選んでいたら」ということにつながるわけだから、ここでは「わたしは他人よりも自分を選んだのだ」ということになる。選択項を前にして *préférer* という言葉を使えば、好き嫌いと相関的に取る、選ぶという意味である。A は「僕には、何

を置いても自分が大切なのだ」、Bは「私は何よりも、自分を大切に思ったのだ」と訳している。

(14) 「自分を欺いた人」 un être qui s'est trompé の訳。tromper qu. はだれかをだます、欺くで、se tromper は一般に「自分を間違える、誤るであるが、ここではあえて「自分を欺く」とした。AやBのように字義通り「みずから誤った人」「自分を誤った人」と訳すと、たとえば前出の se préférer「自分を選ぶ」などとの対応が弱いような気がする。つまり世のいわゆる「すぐれた人と呼ばれる人」とは、結局、「自分を選ばなかった人」であり、それが彼らの言わば原罪のごときものになっているというのが論旨なのであるから、se tromper もうっかり知らずに間違えた、誤ったというより、もう少し積極的、意識的に「自らを欺く」意味が托されている筈だという解釈である。

(15) 「姿を現わさなければならぬ」は il faut qu'il se montre の訳。Aは同じ訳、Bは「自分を示さねばならぬ」となっている。

(16) この箇所原文は Chaque esprit qu'on trouve puissant, commence par la faute qui le fait connaître. Bの訳は「権威あると見られる精神は、ことごとく、おのれを知らせるという過誤から出発する」となっていて大筋において拙訳と一致。Aは「いわゆる強大な精神というものは、皆欠点から出発するから、人目につくのである」となっている。関係代名詞 qui 以下を結果的に訳したために起った誤訳である。

(17) 「己れの存在を世に知らしむる」は se rendre perceptible の、「己れを伝達する」は se transmettre の訳。Aでは「世に認められる」と「処どころうつつき廻ったり」という訳が、Bでは「自分を目立たせる」と「自分をひとの手に委ね」という訳がそれぞれあてられている。se transmettre の訳はAは訳しすぎの迷訳、Bも少し考えすぎか。

「己れとは本来無縁な満足」は satisfaction étrangère の意訳。Aでは「奇態な満足感」、Bでは「満足感を外から仕入れようとして」と訳されている。

問題は「公衆から酒手をもらうのとひきかえに……準備する」満足とは誰の満足かである。果してそれは「酒手をもらう人」自身の満足(感)なのか、それとも公衆の満足(感)なのか。芸人が「酒手をもらって」芸をするような文脈からすればこれは公衆の満足のように読むのが自然であるようでもあり、しかしまた別の見方からすれば、「酒手をもらって」芸をして、喝采

を博すことよって得る芸人自身の満足であるかも知れない。いずれにせよ形容詞 *étranger* は「奇妙な、奇態な」というより、まず、二外の、外からもたらされた」(自分を内として) という意味であらう。文脈として大事なのは *satisfaction étrangère* が原文で二行先の *volturé particulière* と対比されていることである。つまり、大まかに言って、前者はいずれにせよ外的・外因的満足であり、後者は内的・内因的、個的満足なのである。以上の考察を勘案して拙訳では *étranger* という形容詞に「己れとは本来無縁な」という長たらしい、説明的な訳を付したのである。

(18) 「栄光を求めて演じられるごうしたぶざまな演技」は *les jeux informes de la gloire* の訳。A は「栄光」という穢らわしい遊戯」、B は「栄光のごぶざまな演技」となっている。フランス語の *de* はきわめて多岐にわたる言葉の関連づけをする語である。従って *de* が結びつける二つの語がある場合、その二つの語がどのような意味によつてつながっているかをみきわめる必要がある。因みに *chemin de la gloire* といえば「栄光への道」である。

「自らを他に類例のない唯一無二の存在と感ずる喜び」は *la joie de se sentir unique* の訳。この訳も *unique* という語を長えてのことである。A の「自分を独自のものと感ずる喜び」、B の「自己を独自のものと感ずる喜び」はともにややメリハリに欠けるうらみがある。

「大いなる個人的快楽」は *grande volupté particulière* の訳。particulier は「特別な」(A)、「いっぶう変った」(B)というよりも、ここではまず「個的な」(*cf* *leçon particulière* 個人教授)と取る。(註(17)参照)

(19) 「己れを惜しみ」は *avare* の訳。A や B が考えているようにここでは、もの惜しみをするのではない。これまでの文脈からも明らかのように惜しむとすれば「己れ」を外に出すことを惜しむのである。

(20) 「やや志操の堅固さに欠けるがゆえに、名声が赫々として世に現われた人々」は *des individus éclatants, un peu moins solides* の訳。éclatant は「輝かしう」であるが、ここでは無名の隠れた存在に対する、「赫々として世に現われた」意であらう。solide は「堅固な、しっかりした、信頼するに足る」という意味の流れで、「一つ前の文章で「己れを惜しみ、己れを語ることなく死んでゆく人」を称揚していることから、un peu moins solide というのは、そうした意志強固な「もっとも強靱な

頭脳」に比べたら、やや志操の堅固さ（絶対に外に向って己れを語るまいと決意し、その決意を守ること）において劣るの意味と解せよう。そうしてみれば、*éclatant* と *un peu moins solide* との間には一つの読点 (*virgule*) をはさんで一種の因果関係の成立することがわかるだろう。すなわち、人はいずれ志操の堅固さを守り切れないがゆえに、世に現われるのである。

この箇所を A は「これらの人達がいるというその事が、僕に、いわゆる偉人なるものが、やや脆弱な出来であるという事を明かしてくれたのであった」と訳し、B は「これらのひとたちの存在が私に啓示されたのは、ほかでもない、輝かしいが、しかし少々「強靱さ」に欠けた人びとの、存在それ自体によってなのである」と訳している。B は *solide* を *lex têtes les plus fortes* (もともと強靱な頭) の「強靱さ」と同じに解釈しているが、これは『テスト氏……』の語り手の価値基準から言えば、確かに、相關的ではあるが、全体からみればやはり意志・志操の堅固さと取るのが妥当ではないだろうか。

(21) 「格別に傑出しているというのではなくとも……」以下「精神の自由感とはいかなるものであるかが理解できるのであった」までに相当する原文は次の通りである。

Il suffisait d'imaginer les grands hommes ordinaires, purs de leur première erreur, ou de s'appuyer sur cette erreur même pour concevoir un degré de conscience plus élevé, un sentiment de la liberté d'esprit moins grossier.

*grands hommes ordinaires* を A は「通常の偉人」、B は「あたりまえな大人物」と訳しているが、やや舌足らずの感がある。ここは前後の文脈に照らし合わせてパラフレーズすると、「格別に傑出しているというのではなくとも、世に名の聞えているほどの人たち」といったところではないだろうか。ordinaire には、さらに、世にかけられた真の偉人を指して *extraordinaire* と言うとすれば、世に現われた人は、たとえ偉人ではあっても、世に現われたという一事をもって *ordinaire* (通常の、月並な、平凡な) と言うべきであるという含意があるだろう。

*purs de la première erreur, ou de s'appuyer sur cette erreur même* について A は「最初の過ち」というものを全く知らない、知っているとしてもこの過ちに縋らない」と解釈し、B は「彼らの最初の過ちをまったくのがれ、あるいはその過ち自体にすぎることのがれた」と訳している。pur de qe. というのは (……) から純粋な、(……) をまったく知らないという言いまわしで、とくにこここの表現は前出の「偉人などといわれる人はすべて一つの過誤に身を染めた人である」という表現にあった

tâche d'une erreur (過誤の汚点をつけた)と対になった表現である。この過誤は各人の能動的な選択の問題であるから、その意味でも「のがれ」はあまり適切ではないが、とくにBの訳文の使い方はあいまいである。次に s'appuyer sur cette erreur même はどういう意味かといえは、一度世に現われ、栄光の人となった段階で、さらにその誤りを助長するようにそこにもたれかかる(平俗に言えば名声にもたれかかる、外的な要求に答えようとするがあまり内的な探究がおろそかになる)といったところだろう。

しかしこの文章を正確に理解する鍵は Il suffisait d'imaginer……pour concevoir……(…を理解するには…を想像してみれば足りた)という全体の枠組の中で、imaginer……以下の文章をどう読み解くか、なかんずく purs de leur première erreur をどのように全体の意味の流れの中に関係づけて読むかにあると思われる。AもBもそのところに配慮が足りないため訳文の意味するところがいまひとつ不明確である。まず grands hommes という言い方に注意しよう。これは単に偉大な人、偉人という意味ではなく、世に名の聞えている、世間に認知された偉人を言っているのであり、例えばバリのバンテオンに祀られるような人たちが grands hommes なのである。『テスト氏……』の中でもその用法は一貫している。Cf. Chaque grand homme est taché d'une erreur. それなら grand homme と呼ばれる限り、彼らはみないわゆる「わたし」の言うところの「誤ち」「出発点における誤ち」を犯している人々である。そういう不純な人々について、purs de leur première erreur とはどういうことか。AやBのように「最初の過ちを…全く知らない…偉人」「最初の過ちをまったくのがれた…大人物」と平板に関係づけたのでは矛盾するばかりである。ここは imaginer (想像する)という動詞とも響き合って、「もしそうした世に名前の聞えた人たちが最初の(出発点における)誤ちを犯していないとしたら」という一つの仮定・想定として読めば、筋が通り、意味が流れるはずである。

- (22) 「操作」operation、Aは「計算」としているが、ここでは前の文章の「仮定・想定」を指して、「このような発想の転換を行なえば」と言っているとするれば、「操作」が適当であろう。因みに opération chimique といえは化学的操作(実験)の意味である。

- (23) この一文に相当する原文は次の通りである。

Perdus dans l'éclat des découvertes publiées, mais à côté des inventions méconnues que le commerce, la peur, l'ennui, la misère commettent chaque jour, je croyais distinguer des chefs-d'œuvre intérieurs.

冒頭の perdus は chefs-d'œuvre にかかっていること、および commettre という動詞は一般に罪・過ちなどネガティブな行為を犯す意味に用いられる動詞であることにまず注意する必要がある。さてそれなら関係詞を狭んで commettre の目的語となる inventions méconnues とはなにか。一つにはすぐ前の découvertes publiées (公けにされた発見) と対をなす意味で「知られざる発明」ということであろうが、méconnus という言葉には単に「知られない」のではなく、「知られて然るべきであるのに知られない」「不当に認められない」「不遇である」というネガティブなニュアンスがある。inventions méconnues は従って「埋もれてしまった発明」である。そしてその「埋もれさせてしまう」要因となるのが(目先の利益しか追求しない)商業であり、(さまざまな理由からくる当事者の)危惧ないしは倦怠であり、(アイディアを然るべく発展させる時間を与えない)貧困なのである。commettre はそうしたネガティブな結果をひき起すという意味で使われているのだと思われる。

(24) つまり、世に名の聞えた発明家・発見者たちの公的な表の歴史を、彼らも含めた精神のひそかな、本質的に個人の名前とは結びつかない営みの歴史としてとらえ直すということであろう。ヴァレリスムにあっては、公けにされた個々の成果・結果(必然的に個人の名前に結びつく)が問題になるのではなく、それらを背後で支えている精神の運動・営みそのものが価値なのである。

(25) 「各人の清澄な生活の中にひきこもって姿をみせない」は invisibles dans leurs vies limpides の訳。Aは「生活が透き通ってしまって、姿も見えぬ」、Bは「それは生活が澄みきって、姿を目に見せぬ」と訳している。拙訳では各人が世に姿をみせずに澄みきった生活を送るのも、各人の意志の働き、選択の問題としてあるという基本的な理解に立って、「姿をみせぬ」とやや能動的に訳した。いずれにせよここはエビグラフの「デカルトの生はこの上なく単純なものである」を思わせるところである。

(26) Bの訳にある「ありきたりのもの」というニュアンスはここにはあまりないのではないか。refuser de se considérer

autre chose que des choses とは、やや意味を強調して言えば、「自分を（自然界の）ものとして、それ以上にもそれ以下にもみない」ということであり、この場合、ものとは精神と読んでみてもさしつかえないのではないか。つまり自分をすべからず自然が作りだした精神的存在物としてみることによって、精神とはその不断の運動性にこそ本質があるのであって、「時の産物に過ぎない発明や発見にはない」という考えである。

(27) 「一八」九三年十月のヴァレリーを伝記的に位置づけてみればおよそ次のようになる。前年十一月に法律のアグレガシオンを準備している兄ジュールの待つバリへ母親と共に行き、そのままバリにとどまって越年し、十月二三日になってモンペリエに戻るのであるが、その間バリの、オペラ座でワグナーの『ワレキューレ』を聞きに出かけたり、マラルメの姿が見立席に垣間見えるコンセル・ラムルーにピエール・ルイスと共に繁く足を運んだりしている。二月にはフルマン宛に「ああ、残念なのはもはや不可能に対して敢然と立ち向おうとするものが一人もいないことだ」と書き、七月にはジッドに宛て「僕のことと多くの人が見当違いをしてるのは、なんのかの言ったところで結局あいつには文学的野心があるのだと思っていることだ」（七月二四日付）と書き送っている。詳細はここでは展開できないが、前年十月の「ジェノヴァの夜」の危機のあと、バリ滞在によってワグナーのオペラに接し、マラルメの存在も身近に感じて、十月にモンペリエにもどったときにはかなり明確な形で自分の位置付けと未来に向っての指針が意識されていたと考えられる。『テスト氏』の「わたし」は即ヴァレリーではないとしても、作品の成立過程を検証する上で、わたしヴァレリーという関係を見無視することはできない。「一八」九三年十月という日付をわざわざ書き記しているのもそうした側面の重要さを示唆するものであろう。

(28) paroles sources は「低くきき取りにくい言葉」「ぼそぼそした言葉」*etudier* は「研究する」(A)、「検討する」(B)というより「仔細に」観察する」が適当ではないか。

(29) *les sobres gestes qui lui échappent* の *sobre* は挙措が「控え目」なことであるが *qui lui échappent* と補足されることによってその非意図的な側面が強調されている。大げさな身振り・手振りはなくとも、生身の人間としてよく観察すればそれなりの挙措・動作がみとれる筈である。この箇所をAのように「当人には気がつかぬ彼のさりげなく沈着な態度」と訳すのは少し訳しすぎであろう。Bの「彼が何気なくして見せている控え目なしぐさ」はいいが、いずれ *qui lui échappent*

はそれとなくみてとれるほどのことを指しているに過ぎないので、「彼の控え目な挙措」とあっさり訳しておいてもいいのではないか。

(30) théâtre は『テスト氏…』の文脈からすれば、「芝居」(A、B)というよりは(オペラ、音楽会などを含めた意味で)劇場とすべきであろう。

因みに une sorte de b……の b…は bordel(娼家)の略記である。

(31) 「彼はまるで下剤でもかけるように、大変な勢いで食べるのだった」は Il mangeait comme on se purge, avec le même entrain. の訳。直訳すれば「下剤でも服用するように、それと同じ活発さをもって食べる」となるが、これは平たく言い直せば、ひまし油でも飲むみたいに、不味いものを目をつぶって大急ぎで喉に流しこむといった意味であろう。Aの「いつもさも清々とした顔つきで食っている」はかなりそれとは印象がずれているし、Bの「いつも、気負いこんで食べている」も「不味いものを無理に流しこんでいる」感じはあまりしない。AもBも même を「いつも」と訳しているようだが果して適当だろうか。

(32) Tout seffaçait en lui, les yeux, les mains. Aは「すべてのものが定かでない眼にした処が、手にした処が」と訳し、Bは「眼にしても手にしても、彼の中では、すべてが目立たない」と訳している。Bの訳の方が正確と思われるが、「彼の中では」と訳すのはどうか。「彼にあっては」ではないのか。眼と手が出てくるのは、ヨーロッパ人の話すときの身体レベルでの代表的表現器官が眼と手だからであろう。

(33) donner beaucoup à penser は「大いに考えさせる」「考えさせるところが多い」であるが、少々敷衍して言えば「それだけ問題である、特殊である、変っている」ということになる。

(34) 「過剰な能力」faculté excessive とはなにか。記憶力に即して言えば、取捨選択することなしに、ただやみくもにすべてを覚えてしまうような記憶力こそ「過剰な能力」なのであり、不必要な能力なのだ。(excessusは従って、AやBのように「ありあまる(才能)」「人並みはずれた」と訳すのは当たっていない)それならばどのような記憶力がのぞましいのか? 「わたし」はすぐ後にテスト氏の言葉を引用して言っている。「わたしはわたしが欲するところのものを記憶にのこす」と。従ってそ

のように欲するものだけが残り、改造された記憶力こそ理想なのである。

因みにヴァレリーにとって記憶作用による「想い出」というものはその内容いかんにかかわらず悉くおぞましいものである。精神が「不断の運動」によって特徴づけられる生の原理であるとすれば、想い出は残滓であり、脱殻であり、反知性であり、死の原理である。

(35) *retourer le vit* を A は「生身を削る」、B は「生身を削り取る」とほぼ同じように訳している。*retourer* は一般に原稿・草稿などのある箇所に線を引いて削除・抹消することである。ここでは「本も捨て、自分の書いたものも焼いてしまった」とあとの事なので、「生身に直接線を引く」わけで、解りやすく意識すれば「精神に生起するもの」(*le vit*) に直接赤を入れて、推敲・彫琢する」ということになる。「生身を削る」という日本語はいかにも意味ありげだが、果して、右のような解釈をよく伝える表現であろうか。

(36) 一文の主旨は要するにテスト氏の大きな関心の一つが「時間」であるということであろう。*l'art délicat de la durée* とは「持続(≡時間)がもたらすデリケートな作用」のこと、たとえば『カイエ』のノートにも「われわれの精神の内に二重性が現われるときには必ず時間が存在する。時間とは二重性、差異性にかかわるすべての事象の総称である。」(I・302)とか、「知的なある局面を具体的に研究するなら、心的時間の諸条件を探究することだ」(I・368)と書かれ、時間が精神現象を説明する主要な鍵を握っていることが指摘されている。

(37) 原文は *Il veillait à la répétition de certaines idées; il les arrosait de nombre. veiller à* は A や B のように「監視する」と訳すより、ここでは「(…)に注意する、留意する」が適当であろう。*arrosar* は一般に「液体などを」まぐ、かける」の意、*nombre* は数である。*arrosar de* *dessence* とくれば「…にガソリンをかける」であるから、*arrosar de nombre* は「(あるものに) 数をふり注ぐ、すなわち観念に数の概念を導入すること、観念を数値化することであろう。精神現象を具さに観察すると、その不断の運動性のうちにある種の観念が繰り返し現われるのに気づく、そこに注目し、それらの基本的な観念を数値的に厳密に表象する試みを考えるということだが、十九世紀末から今世紀初頭にかけて隆盛になった記号論理学、数理論理学などのアイデアに一派通じるところがある。ただし、*arrosar de nombre* などという言い方には、なにか料理をし

ながらかくし味にコニヤックでも注ぐようなところもあり、言葉の錬金術 (alchimie du verbe) とはいった趣も感じられる。  
『カイエ』の次のようなノートも参考になろう。

「ごく若い頃に、わたしはあらゆるもの、あらゆる事件、感覚、感情、持続、観念の間に——数値的な関係と似た関係が存在するに違いないと確信した。認識は自分の領域に入ってくるすべてのものの間に必然的に一種の最高度の通約性を要求するからである。

その関係をわたしはより精妙な数と呼んでいた(…)」(IV・679)

(38) 精神のメカニズムを解明し、その働きを精密な機械のごとく制禦すること、辛苦の努力の末、ついに、一切の精神事象が機械的に統禦できるようになること、奇妙ではあるがヴァレリスムの中核に位置する一つの夢である。

(39) Maturare「熟させる、成熟させる」「終らせる、(企ての完遂を)急がせる」意のラテン語の動詞の不定形。前の文章の動詞 resumer「要約する、簡潔な形にまとめる」に呼応して「成熟させることだ、早く完成させねばならぬ…」といった意味か。

(40) 方法 méthode とは「思考方法、理路」のことである。

(41) des sentiments qui me faisaient fremir は「わたしを震憾させるさまざまな感情」であるが、この「感情」は「わたし」に垣間みられたものであるから、テスト氏の「感情」のド・ラ・ラ( )である。

une terrible obstination dans des expériences enivrantes に enivrantes は expériences enivrantes の意味が重要。expérience は「体験」(A, B)ではなく「実験」ではないのか。enivrant は「酔わせる、夢中にさせる」で、結局、この種の実験に手を染め始めるとそれ自体奥の深い、涯しない探究であるためにそこから脱けられなくなってしまう事態をさして言っているのではないか。『テスト氏』：執筆前後のジッドやフルマン宛の書簡には、いわゆる文学的野心を捨て、人間精神の探究という前人未到の領域に足を踏み入れ、格闘しながら、ときに恐ろしい孤独と不安にさいなまれる若き日のヴァレリーの姿が赤裡々に告白されている。enivrant な「実験」に対して示される terrible obstination とはまた、そうした意味で、「恐ろしい」「すさまじく」意志の力なのである。

拙訳の *enivrant* は右のような解釈にもとづいた意識であるが、「ひとたび着手すれば酒精のごとく魂を奪う」は「飲めば酔  
丁させる」というあたり前の言い方のバラフレーズであると同時に、次の文章の *l'être absorbe dans sa variation* 「自ら  
姿容に心を奪われた存在」という表現に呼応させた訳である。

(42) *discipline* は「訓練」(A)「鍛練」(B)というより「規律」ではないか。 *tuer* は「殺す」(A、B)ではなく「制す」と  
した。

(43) 「こんな言い方はおかしいに違いない」というのは、通常理解では、誰しも自分の考えることについての全面的な責任  
はその人にあるのであるから、その意味では、みな自分の思想の「主人」は自分なのである。しかし、ヴァレリー流に考えれ  
ば、多くの人が思考のメカニズムのなんたるかを知らずに、自分の思想を表白している以上、本質的な意味で自分の思想の主  
であると言えるためには、人は「精神の諸法則を発見した」テスト氏の高みに達していなければならぬのである。

(44) メランコリーは文学史的にはロマン派が好んで扱った情緒である。

(45) *confondu avec les choses* は「事物と一体になる」。 *On se sentait reculé, mêlé aux maisons … On se sentir reculé à*  
という表現は「追いつめられて背に…を感じる」「すぐ背後に…がせまるのを感じる」といったほどの意味であろう。

(46) … *pouvait venir à lui*. 「話そうと思えば口をついて出ただろう」(A)、「彼の心にうかんだことは、あり得ただろう」  
(B)とどうよりも実際にそういふこともあったという方が正確ではないか。

(47) *Il savait admirablement qu'elles auraient emu tout autre. 11* の文末の *tout autre* は *tout autre que lui* と考えられ  
から、「自分以外の他者」と訳す。

(48) *la puissance régulière de son esprit* 「彼の精神の安定した力」。ヴァレリーは自分の精神について、「不安定 (*irrégulier*)  
で、むらぶがあふ (*inégal*)」を屢々嘆じている。

(49) *une quantité de faiblesse* を A、B 共に「幾多の欠陥」「大量の弱さ」と訳しているが、果してこの場合 *une quantité*  
*de lettres* 「大量の手紙」と同様に扱うのが妥当だろうか。文章の自然の流れの中から必ずしも「大量の」という意味が感じ  
られないので「ある量の弱さ」とする。

- (50) merveille は「驚異」(A)、「非凡さ」(B)と訳されているが、要するに「(精神を)眩惑(するもの)」の意であろう。  
dur は faible に対立するから「堅固(な人)」の意、Aの「堅牢」は近いが、Bの「厳格」はどうか。
- (51) Mon propre enthousiasme me le gâche…Aは「僕自身の狂熱さえ彼を台無しにしやしまいかと怖れるのだ…」、Bは「私の熱狂は、彼の姿を歪めてしまうのかも知れない…」と訳しているが、口調はもう少し断定的であろう。また Satior は「台無しにしてしまう」「企めてしまう」ことに相違はないが、前の文章に「彼について、銅像が立つ人物について世間の人が言うのと同じような言い方をしなければならないのは残念だ」とあるから、内容を汲んで訳せば、「イメージを卑俗にしてしまう」といったことになる。
- (52) Je devinais…動詞 deviner は実際に目のあたりにするのではなく、想像裡に見ること、洞察することであるから、「わたしには…が目に浮かぶのだ」と訳せる。
- (53) Je simplifie grossièrement…「(複雑な対象を)単純化して大略を述べる、大まかに素描する」ほどの意味で、「不体裁に」(A)、「粗雑に」(B)というネガティブなニュアンスは、皆無ではないにしても、それほど強くはないのではないか。
- (54) Je n'ose pas dire…「敢て言わない」「とても言えない」の意。
- (55) 「論理が障害となる(妨げとなる)」というのは、人に語ろうと思えば論理的に語るほかないが、テスト氏の存在は論理を越えているところがあって、自分にもとらえ難く、いわんや人に語ることなどできないという意味であろう。
- (56) …apparaissent de curieuses formations:「奇妙な形成が姿を現わす」(A)。formations は「精神の中に形成されるもの」「心象」「イメージ」であろう。全体としては、テスト氏のことを考えると、きまって、普段考えないようなさまざまな考えが頭の中に湧き起ってくるということであろう。
- (57) Il se représente à mon souvenir, à côté de moi. Aは「記憶の裡に彼の姿が浮んできて、僕の傍らに座る」、Bは「彼の記憶にうかび、私のすぐそばに座る」と訳している。「記憶がうかんで…座る」というよりも「座った姿が記憶にうかぶ」のではないか。
- (58) …je l'entends, je me méfie. Aは「彼の声が聞えて来る」とわが身の方が疑わしくなる」、Bは「彼の声をきき、私は疑

惑の念に駆られる」と訳している。まず *je l'entends* は単に「彼の声を聞いて来る」のではなく、「彼の言うことを聞く（耳を傾ける）」のである。それなら *je me méfie* はどれほどの意味であろう。一般に *se méfier* は「用心する、警戒する」の意である。相手が信用ならなかったり、相手の言うことが複雑で解りにくかったりする場合、気をひきしめて、相手がなにを言うのかに神経を集中するような状態が *se méfier* の心理状態である。従って、この文脈では、「緊張して身構える」「緊張する」「気を張りつめる」といった日本語に相当するのではないか。

(59) *me heurter à sa pensée* 「わたしを彼の考えと衝突させる」と解釈する。*se heurter à qc* は「なにかにぶつかる」だが、単に「出くわす」(B)ではなく、齟齬・矛盾などを感じさせることであろう。従ってそのあたりの事情を斟酌して、意訳すれば「彼の言ったこと(= *sa pensée*)を思い出して、おやおかしいぞと思うことがある」となる。 *quand un événement...* は前の文を受けて、「と思ったたらその時事件が起って…」とつながる。

(60) *expériences illusoirs* は「想像上の実験」と訳す。*expériences* が A、B の訳のように「経験」や「体験」でないことは、このあとに列挙されている *expériences* の内容に照らし合せても明らかであろう。これは「実験」である。

(61) *souffrant* は「悩む、悩んでゐる」(A、B)のではなく、「病気になる、病む」の意であろう。オペラ座での観劇のあと、テスト氏のフットマンでの姿にこの質問に答えるようなシーンがある。

(62) ...*il souffre...* 「彼は病む」は註(61)に同じ。

(63) *gémissement élémentaire* の *gémissement* は「うめき、嘆き」だが、*élémentaire* は *besoin élémentaire* 「基本的欲求」というときの意味に近くと思われるので、この「うめき」は精神的呻吟の対極にある「動物的うめき」であろう。

(64) 「テスト氏と田中柱とあたりのものが一緒に浮かぶ」は原文 *Je le (= Monsieur Teste) revols debout avec la colonne d'or de l'Opéra, ensemble* の訳である。原文のリズムに従って読むとこのボワン・ヴィルギョール(…)の後に置かれた *ensemble* という一語はきわめて強い喚起力を持っているように思われる。前文の訳語を反復しながら、意味を強調して訳したゆえんである。

(65) *tron* は「棧敷」。B の「ほっかり穴をあけた」は正しくない。

(66) un groupe murmurant au delà de l'éblouissement の訳。murmurant  $\wedge$  murmurer は「ささやく、小声で言う」、éblouissement を「驚嘆、賛嘆」と取れば、au delà de l'éblouissement は「驚嘆を越えて、驚嘆を絶して」となり、全体としては「舞台上に進行する劇や聞えてくる音楽に（感激し、賛嘆の言葉を小声でかわしている）一群の人となろう。」

au de la de l'éblouissement を A は「見渡せば眼を奪うばかり」とし、B は「眩く光景の頭上」としている。A の訳はフランスの語の読みとして根拠薄弱だが、B の訳も「眩く光景」は何を指しているのかわからない。場景としては、場内の明りが落とされて、舞台でオペラが進行中な管であるから、「眩く光景」といえば「舞台」を指す以外に考えにくい。…

(67) Mon regard épelait mille petites figures, tombait sur une tête triste, courait, sur des bras, sur les gens, et enfin se brillait.

épelait は「言葉の綴りを言う」「(文字を) たどたどしく読む」が原義であるが、ここでは場内の観客の顔を「一つ一つ品定めする」ほどの意味であろう。

se brüler は受動的代名動詞と取れば「燃える、燃えつきる」、ただし se brûler les yeux といえは「(目を使いすぎて)目を痛める」だから、「燃えつきる」と訳して、「見すぎて目が痛くなった」意味も含むということにする。

(68) 舞台の上で展開されているのは、たとえば劇中の男女の永遠の愛の絶唱である(作品を特定することは到底できないが、このあとで音楽のことが話題になることや、一八九三年のヴァレリーの伝記的事実からして、ワグナーの楽劇が当夜のだしものであると想像することは可能である)が、そうしたドラマは本質的に「個人の内密にかかわる」「独自の」「人にはみせない心の動き」であって、それを今、劇場という公共の場で、社会のさまざまな階層の人たちが、それぞれの階層の感受性をもつて、グループで鑑賞しようとしている、そうしたバラドクサルな状況が「わたし」には面白くてしかたがない(J'avais la sensation délicieuse que…) のである。

(69) J'errais sur ces étages d'hommes…。J'errais…は文字通り訳せば、「わたしがさまよう」のであるが、ここでは実際に歩かず、わらわけるのではなく、「視線をわたせよわたせ」とする。

avec la fantaisie de joindre idéalement…、idéalement は「観念的に、頭の中で」の意。全体としては「あらゆることを考

え、空想をたくましくする」といったほどの意味であろう。

(70) この文脈での *stupidité* は「愚かき、ばかけていること」であるよりは「茫然自失の状態」「夢中になって我を忘れている状態」であろう。

*n'importe quoi de sublime* は単に「何物か崇高なもの」(A)、「何か崇高なこと」(B)よりも少し軽蔑的なニュアンスをこめて言われている筈である。

(71) *L'éclairage* *les* *tient* 「照明が彼らを一つに保っているのだ。」舞台で劇が演じられてるとき、観客席の照明は落ちていゝる。そしてそれがまさに観客を一つの同じ薄闇の中に包みこみ、彼らの意識をひとしご、舞台上に集中させているのである。

(72) 《*Personne ne médite*》Aは「誰も瞑想なんかしませんよ」と訳し、Bも「瞑想なんてどこにもありゃしませんよ」と訳している。しかしテスト氏は思索の人であり、瞑想の人である。A、Bの解釈は妥当であろうか。むしろ、「(いまや) 瞑想にふける人が誰もいない」「ものを本当に考える人がもういない」という嘆きの言葉として読むべきではないだろうか。

(73) *plus large, plus étroite, plus étroite, plus large* 広い道、狭い道、広い道と深夜の街を歩いていくことであるが、原文の味わいは *plus large, plus étroite, plus large* という簡潔な音のつらなりが、みごとに「軍隊式の歩調」のリズムを模倣しているところにもあるだろう。

(74) *réponds-je*…「答えて言った。」「天馬」誌掲載のプレオリジナルではイタリック体になっていなかった。のちにイタリック体にしたのは、恐らく、すぐ前に夜の街を歩きながらのテスト氏の言葉が努力してもよく理解できず、ついていけなくて背一杯、とても答えることなどできなかつたという意味の叙述があるからであろう。たまたま話しが自分の理解の及ぶところに来たので、ヤット口をはさむ機会を得て言ったというほどの意味でイタリック体にしたものと思われる。

(75) *J'y vois l'illusion d'un travail immense, qui, tout d'un coup, me deviendrait possible*…*y* は「音楽」である。in *travail immense* 「こつこつめない仕事」とは、その「音楽」を聞く者がそこに感じる「歴大な精神的営為」のことである。そしてそうした高度な精神の運動を垣間みることによって、聞く者の精神が触発され、「とてつもない仕事がわたしにもできそうに思ひ」にかられるのである。

(76) … choses anesthésiques…「麻酔剂的効用を持ったもの」。前に「特別な陶酔感を覚え」させてくれるものという表現がある。「麻酔剂」とあえて言うのは、「痛み・苦しみをしはし忘れさせてくれるもの」の意と取れる。

(77) … je hais les choses extraordinaires. les choses extraordinaires は単に「異常な物事」(A)「異常なもの」(B)では不十分で、「(世間で)これはすごい、並はずれたことだとさわくようなこと」の意であろう。たとえば「天才」「神」がそれである。

(78) Dans le passé, je ne voyais qu'idées volées à moi

idées volées à moi は「(人が)わたしから盗んだ考え」である。奇妙な考え方であるが、要するに、精神の人たる若きテストにとって、すべての観念は自らの精神のうちに胚胎すべきものなのである。もっとも偉大な精神はもっとも自在に運動し、もっとも多くの組合せをつくりだす精神だからである。ゆえに、若きテストにとって、世にもてはやされる少しでも見るべき価値のある観念は悉く彼自身がすでに発見し、己れの精神の内部に温めてきた観念であって、それが他者の名前と結びついて提示されるのを見ると、あたかも「自分の考えが人に盗まれた」かのようにみえるのである。

ベクトルの方向は違うが、同じようなヴァレリーの精神の特異体質 (idiosyncrasie) を語っている『カイエ』のノートの一つに次のような記述がある。

「おやこれは深い——傑出した etc —— 考えだ。しかしこれはわたしが発見した考えではない。

ゆえに、わたしはその欠陥を見つけ、わたしを感心させたかどで、そいつを罰さなければならぬ。これは死活問題だ。」

(I・712)

(79) Dire que notre propre image ne nous est pas indifférente!

直訳的には「われわれ自身のイメージ(＝他者の眼に映る姿)がわれわれにとって無関心でないとは！」となり、わかりやすく言い直せば「自分が人にどうみえるか(自分のイメージ)が気になるなんて！」となる。つまり他人の「すぐれた考え」に行きあたるたびに、「自分の考えを盗まれたように」思った昔の自分は、とりもなおさず他者の眼からみでの「自分」にまだ執着している自分であって、そんなふうに感じることを「なんと愚かなことか」と自省・自嘲しているのである。Aは

「つまり、われわれ自身の像というものは、われわれに赤の他人のはずがない、そうでしょう」と訳し、Bは「われわれ自身の像は、どうでもいいというようなものではないのに！」と訳して、意味が逆になっている。

(86) Dans les combats imaginaires, nous la traitons trop bien on trop mal!

「われわれのイメージ(=la)をうまく扱う (a traiter bien) / 悪く(下手に)扱う (a traiter mal) は、こゝでは本質的に自己評価の問題と関わっていると考えられるので、結局は parler bien (mal) de qn. (...の)ことをよく(悪く)言う)と同様に、「自分のイメージに対する評価が高い(低い)」ということになり、その解釈で訳せば「自分自身のイメージを過大に評価するか、過小に評価するかどちらかだ」となる。つまりあくまで個を価値基準として保持すれば、精神世界においても「自己のイメージ」は大切であり、それが前面におしだされもしようが、精神とはそもそも一切の固定した像(イメージ)を拒絶する運動であるというヴァレリスムの立場からすれば、個人は消えてしまふのである。

(81) travail traditionnel は「やりつけの仕事」(A)、「いわゆる仕事部屋」(B)というより「いわゆる机の前に座ってみんながする仕事」であり、広い意味での「書き物」を指して言っている。

(82) êtres de raison は「観念的存在」である。

(83) pur et banal, pur 「純粹」とは一切の虚飾を排してほとんど抽象的な純粹さに達したという意味であり、banal 「平凡な、凡庸な、陳腐な」とはバリの裏街の貧しい部屋としてはどこにもありそうな、目を引くようなものはないといった意味で、同じ部屋を象徴的にみた場合の貧しさ、味気のなさを語っている。

(84) abandon nocturne は昼間の緊張に対する「夜の解放感」、夜更けからの意識の弛緩した状態を想わせる。

(85) Huit cent dix millions soixante quinze cinq cent cinquante... 一見何気ない数字の羅列であるが鼻母音の [ɑ] [ɛ] が交互にひびきあって、けだるい音楽的效果をあげている。

(86) 「流行」は les passions の訳。「情熱」(A, B)ではよく解らない。大衆が「熱狂・熱中するもの」の意味に理解した。cf passion du jeu 賭博癖, passion de voyager 旅行熱

(87) Il souffrit. 「彼は苦しもうにいた。」なんであるかはわからないが、後に述べられているところと関連させて考えるなら、

ときどき激痛のようなものが襲ってくる病い、ヴァレリーがジッド宛の書簡の中で洩らしている「神経痛」*névralgie*のごときものと推定することはできよう。

(88) Vous ne vous ennuyez pas. 「気になさらないで下さい。」自分が人前で苦しそうな様子をしたことに對して言っている。

A、Bはともに「退屈でもないだろう(でしよう)」と訳している。

(89) et fit le mort. A、Bの「死んだ真似をした」「死んだようになった」は直訳すぎないか。「じっと動かなかった」で十分であろう。

(90) un mouvement immense. 海原のイメージで語られているので「とてつもない、うねりのようなもの」とした。

(91) ma pensée の訳。「自分の考え」でもかまわないが、「考え」というとなにか一つきまった考えと取られがちなので、あえて「意識」とした。次の文章の「意識」も同様に la pensée の訳語である。

(92) par une série d'efforts は「いろいろな体を動かしてみて」と訳す。effort を「努力」と取ってもそれほど意味の差はないが、ここでは物理的な「力」「応力」と関連させて、「手、足をあっちにのばしたり、こっちにひっぱったりすること」と取る方がより文脈に合致しているように思われる。

(93) J'ai...un dixième de seconde qui se montre...文字通り訳せば「わたしは姿を現わす十分の一秒を持つ」となるが、「十分の一秒」は「ほんの一瞬」のごとであり、「姿を現わす」というのは「意識の前面に現われる」意味に解釈できる。つまり、痛みが襲ってくるのであるが、それは長く続くわけではない、「あっ」という一瞬の間に姿を現わし、消えていくのである。

(94) C'est très curieux 「実におもしろい」は興味深<sup>く</sup>の意である。

(95) éclairs は単に「光」ではなく、「苦痛の閃光」であろう。

(96) Et pourtant ils me laissent incertain. 「しかしながら、それらの閃光もわたしを相変らず不安定なままにしておくと、いう意味は、ある種の「痛み」が「閃光」のごとく身体の闇をはしって、痛みの帯域をここからあそこまでと照らします(教えてくれる)のであるが、しかしだからといって、テスト氏はそれでもうこれからやってくる本格的な痛みについてすべてを知らされ、いっどこから襲ってくるかもしれない不確定な状態から解放されるわけではないという意味であろう。

(97) diffus 「焦点が定まらず拡散したもの」。

(98) J'y pense! Aの「つまり僕は思索するのだ」も、Bの「それについてぼくは考える」も正確に文章の呼吸をとらえていないように思われる。この文句は「そいつがやってきそうになると(Quand cela va venir)」に始まる「苦痛の幾何学」のクライマックスに相当する部分である。なにか違ったこと、たとえば砂粒を数えていられるような段階から、次第に痛みが大きくなってきて、いやおうなしに意識が痛みを観察せざるを得なくなり、やがてそれ(痛み)が意識の前面にでてくる、この考えまい、意識下におさえておこうとする努力が徐々に無化されて、ついに「恐るべき対象」(痛み)と真正面からぶつかる(そいつを考へる)こと、それが「J'y pense!」という悲鳴なのだ。

(99) Je combats tout. — hors la souffrance de mon corps, au delà d'une certaine grandeur.

combattre は単に戦うのではなく、戦って「抑える、制圧する」のである。(cf combattre l'incendie 消火に努める、鎮火する) hors は excepté, sauf の意。au delà de... は付帯的な条件で「ある大きな(程度)を越えた」となる。AもBもこの訳は「肉体の苦痛をのりこえて」と意味が逆になっている。

(100) 「未来の病いを予測していた」は、テスト氏がこれからやってくる痛み(未来の痛み)を予測して対処した上述の体験を指す。

(101) cette vue sur une portion évidente de l'avenir 直訳すれば「未来の明らかな一部分に関するこうした見通し」。「未来の明らかな一部分」とは「未来に必ず起ることがわかっている事柄(未来の一部を構成することは明白な事実であるような事柄)」である。cette vue とは「上述したような」見方、見通し「予測」である。

(102) 「多くの観念のうちの一つ(…)だからこそ、それを追ってこれたのだ」というのは、それが苦痛として現実化してしまえば、もはやそれを観念として冷静に観察する術はなくなり、身体感覚に圧倒されてしまうのである。従ってそれに對して精神がなんらかの力を發揮できる唯一の形は予測という形である。なぜなら予測ということが可能なだけの十分な距離をとってはじめて、それは観念として現われるのであるから。ここで苦痛を単なる身体的苦痛と考えずに、精神的な苦痛(たとえば愛の苦しみ)にまで敷衍して考えれば、テスト氏の主張は一層明瞭に理解できよう。すなわち一切の身体的・精神的脅威はそれ

が現実には、観念として精神のうちで十分に分析しておけば、制圧できるということ……(ただし「ある限度を越えた肉体的苦痛は別にして」……)

(103) Rien de doux ne me pèse…

doux は「優しき」であるが、この「優しさ」はテスト氏にとっては心の重荷になる——精神のスムーズな働きを妨げる(乱す)——ものであり、「感情に対する嫌悪感」(IV・34)「わたしの感情の中で最も強い感情は自らの感情に対する憎悪の感情」(IV・45)と書くヴァレリーの文脈では、「甘美であるがゆえに」感情をかき乱すもの」に他ならない。

(104) Je suis volé, volé は「だまされる、ごまかされる」の意から、ここでは「やられてしまう(精神の眼をくらまされてしまう)」ととった意味であろう。

(104) l'état du moindre fait qui se produit. 「精神に形成されるほんのちよっとしたこと的光輝」といった意味だが、要するに、話し相手がだれであろうと、相手が言いたいことをきちんと証明する人であれば、それがどんな些細なことであり、そこに確かな精神の運動をみることができ、それが精神の人テスト氏にとってなによりも大切なのだということ。

\* なお『テスト氏……』の翻訳としては別に粟津則雄訳(初版一九六七年現代思潮社)が流布しているが、訳註が煩瑣になるため、あえて比較参照の対象には加えなかった。Aの小林訳が大筋において一九四四年のものであり、Bが一九六〇年であるのに比べて、粟津訳は一九六七年初版ともっとも新しい。それだけ改められている面もあるが、筆者が訳註について指摘したいいくつかの点については、やはり今後検討されるべき問題が残されているように思われる。